

## 陶器職人における専門家アイデンティティの生成と継承 I

— 島袋常秀氏の人と仕事をめぐって —

岡本祐子

Generativity of professional identity in potters I :  
An analysis and some considerations on  
Prof. Tsunehide Shimabukuro's life and professional works

Yuko Okamoto

本研究は、Profession の生成と継承に関する第一研究として、Erikson(1950)の精神分析的個体発達分化の図式を理論的基礎におき、陶器職人の専門家アイデンティティの生成と継承のプロセスと、それに関わる要因を分析した。沖縄県読谷壺屋焼の代表的な陶芸家である島袋常秀教授に対する個人面接から得られた語りの分析によって、氏の陶器職人としての専門家アイデンティティ形成の特質と熟達のプロセス、専門的職業レベルにおける心理社会的課題の体験のされ方を考察した。専門家アイデンティティは、基本的信頼感、自律性、自主性、勤勉性、アイデンティティ達成という乳幼児期からの心理社会的テーマが、専門的職業の次元で再度重要な意味をもち、それらを再達成することによって発達・深化していくことが示唆された。また、心理臨床家と職人のプロフェッショナル・ワークにおける共通の特質が見出された。

キーワード：専門家アイデンティティ，生成と継承，陶器職人

### はじめに — 仕事がアイデンティティを深化させていく道行き —

本稿では、仕事が深くその人のアイデンティティを支えるとはどういうことなのかについて考えてみたい。そして、そのような人生を送った人は、どのようにアイデンティティ形成を行い、それを次世代に継承していったのかについても、論考してみたい。このような人の仕事の多くは、専門的な仕事ということになるであろう。

古くから言われてきたように、そして今日も多くの人々が実感しているように、中年期が人生の

---

本研究は、2009-2012年度 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)「3 専門職種における生成継承性の心理的特質と発達過程に関する研究」(課題番号 21530691, 研究代表者 岡本祐子)の一部として行われた。

峠であることは間違いないであろう。それは、ライフサイクルを通して生成され続けるアイデンティティの峠といってもよいかもしれない。中年期はまた、アイデンティティの頂きであると同時に、もう一つのテーマ、世代継承性の本格的な営みの時期でもある。それは、青年期に志し、深く打ち込みながら達成してきた専門の仕事の、あの程度の頂きを経験し、それを次世代に伝えていくことである。中年期も終わりに近づけば、その中心の座を後進に譲っていく、そして徐々に傍らから、後ろから見守るという姿勢へ、世代継承性は、少しずつその質を変えながら、人生の後半期の心を深めていく。

アイデンティティは、青年期に一応のところそれらしい形を見せる。そしてそれに続く成人期の人生は、自分は何をして生きていくのか、人生の中で何を指すのか、というアイデンティティの本質的な問いに馴染む形で、他者との関係性が広がり、それは次第に確かなものになっていく。

中年期以降の人生は、人生前半期に打ちこんで達成したものにさらに磨きをかける「個」の達成と、それを土台に次世代を育てていく世代継承性の、2つのテーマがいわば二重らせんのように重なり合って展開していくのであろう。

Erikson(1950)が20世紀半ばにアイデンティティ論を提唱して以来、青年期のアイデンティティ形成については膨大な研究が蓄積されてきた。そして、青年期に一応のところ形成されたアイデンティティは、そのまま生涯を通じて維持されるのではなく、人生の危機に遭遇するごとに問い直され、組み直されて深化・発達していくこともわかってきた(岡本, 1994, 1997, 2002, 2007, 2010)。しかしながら、中年期に確立・達成された専門家アイデンティティは、次世代へどのように継承されていくのだろうか。この世代継承性(generativity)については、中年期のもうひとつの重要なテーマでありながら、おどろくほどわかっていない。

次世代を生み育てるという generativity の課題において、出産・育児、人育て、教育、ケアなど、一般的な世代性の営みはすでに成人初期から始まっている。私がここで考えてみたいのは、より鮮やかな形で生成され、そして継承されるであろう専門的な仕事におけるアイデンティティの形成と継承の問題である。

私たちは、固有の文化や世界に根差した職人の、心魂を傾けた作品に出会い、心を揺さぶられることがある。そういう時には、その作者が、その世界に自己を投入し、これほどまでの技を自分のものとするまでの道行きに思いをいたし、畏敬の念をいだかずにはおれない。

人がその世界に出会い、数々の技と精神を受け継ぎ、心血を注いで作品を生み出す、その道行きは、作者自身の「人間探求」そのものであると思われる。プロとしての仕事とは、古いものと新しいものが重なり合い、少しずつ形を変えながら、ゆっくりと発展するものである。学問の世界でも、おそらく芸術や技能の世界でも、そこでは基本的なものが決定的に重要な意味をもつ。その基本、つまり「型」を血肉にし、それに拠って自己を訓練することで初めて、人はその世界に参入することができる。そして、基本・土台となる「型」を自分のものにした人々は、自己の内的な創造性を生涯にわたって発揮し形にしつづけることができるのであろう。

歴史を紐といてみると、その世界に彗星のように現れ、新たな地平を開拓していった天才的職人もいたかもしれない。しかし、自分の師との直接的な関係の中で、手ほどきを受け、あるいは師の

技を精緻に見とって自分のものにし、自立し熟達していった人々の方がはるかに多いであろう。その自立と熟達のプロセスはどういうものなのだろうか。一方、熟達した職人となった師の側から見た場合、その継承はどのように行われるものなのだろうか。

## 問題の所在と専門家アイデンティティの生成に関する仮説

私はこの小論において、人が固有の専門世界に自己を投入し、独自の仕事を生み出していく、その心的プロセスと、それを達成していく心理的な要件について考察してみたい。そこには、上の世代から受け継いだ資質や環境が、自らの中に主体的に取り込まれ、熟成していく営みがあるはずである。そして、このような専門的仕事は、自ら達成した独自性を次世代に示し、継承されていく営みと並行して進むことによって、さらに深化していくにちがいない。

ここで、私は、2つの仮説的イメージを提出したい。

### 1. 専門家アイデンティティの4つの段階

専門家アイデンティティの達成・深化のプロセスは、少なくとも次の4つの段階があるのではないであろうか。まず第1の段階は、成長期、つまり誕生から青年期までの時期であり、アイデンティティそのものが形成される段階である。専門家として人生を送るためには、意志力をはじめとして、土台となるアイデンティティがしっかりと形成されていることが不可欠であろう。

第2の段階は、青年期に一つの専門分野を志向してからプロとして自立するまでの段階である。ひとつの専門世界を志すのは、通常、青年期かそれ以降であり、中には、法律家や心理臨床家のように、大学院から専門的職業をめざした訓練の始まる分野もある。第3は、専門家として自立した後の段階である。自立した後も、専門的職業人は生涯、勉強・研鑽（プロとしてのbrush up）が必要であることはいうまでもない。第4は、第3段階にすでに萌芽している次世代へ関わり、「次世代を育てる」というテーマが拡大、深化、達成されていく段階である。これらのプロセスと各時期の特質は、心理学の言葉でどのように記述されるのであろうか。

### 2. 専門的職業レベルにおける心理社会的課題の体験

第二の仮説は、その専門的職業世界における心理的課題に関するものである。専門家アイデンティティは、青年期までに達成されたアイデンティティを土台として、その上に積み上げられる形で生成されるものであろう。専門家アイデンティティの形成もまた、アイデンティティ形成と同じように、専門的職業世界の中で、基本的信頼感、自律性、自主性、勤勉性、専門家アイデンティティの達成という心理社会的課題を体験しながら形成されると考えられる。

よく知られているように、Erikson(1950)は精神分析的個体発達分化の図式 Epigenetic Scheme (図1)において、青年期のアイデンティティ形成の前駆となる心理社会的課題として、基本的信頼感(乳児期)、自律性(幼児初期)、自主性(幼児後期)、勤勉性(児童期)を挙げている。それらは、誕生後大人になるまでに、人間の心・人格が健全に発達していく上で欠かすことのできない心理的経験の質(心理社会的発達課題)を表わす。つまり、①自分をとりまく世界に対する信頼感(自分が生きている世界は「安心できる」という感覚)、②自律性(世の中には「従うべきものがある」という感

覚)、③主体性(自分にはやりたいものがある、やれるのだという目的感)、④勤勉性(現実「やれる」力・技を身につけること)、そして⑤「居場所感」(自分きこの世界に立ちたい・立てるという感覚)である。専門家としてのアイデンティティ形成も、仕事世界の中で、こういう経験の質を踏んでいくことが必須なのではないであろうか。この仮説的イメージは、図2のように示すことができる。その具体はどのようなものであろうか。

本研究では、面接調査によってこれら2つの仮説的イメージの具体を検証する(目的1, 2)とともに、プロの陶器職人の熟達のプロセス(目的3)について考察する。目的3の職人の熟達プロセスについては、私は、これはという仮説を持ってない。これらはきわめて魅力的な問題でありながら、私自身の専門である発達臨床心理学からはるかに遠い世界だからである。したがって、第3の目的については、面談の中で得られた内容にもとづき、アポステリオリ(帰納的)に考察することにしたい。

### 研究の対象と方法

本研究では、沖縄県立芸術大学教授であり、読谷壺屋焼を牽引する代表的な陶芸家である島袋常秀氏の人と仕事に基づいて、上記の3つの目的について具体的に検討し、考察する。島袋常秀氏の伝記を記すことや氏の作品を論評することは、本論の目的ではない。そのようなことは私の能力をはるかに超えたことである。ここでは、氏の人生と仕事から見えてくる専門家としてのアイデンティティの生成プロセスについて考える。それは、島袋常秀先生固有の人生と経験でありながら、多くの普遍的特質が内包されていると考えられるからである。

		1	2	3	4	5	6	7	8
VIII	老年期								自我の統合 対 絶望
VII	中年期							世代性 対 自己陶酔	
VI	成人初期						親密性 対 孤立		
V	思春期 青年期					アイデンティ 対 アイデンティ 拡散			
IV	児童期				勤勉性 対 劣等感				
III	幼児後期			自主性 対 罪悪感					
II	幼児前期		自律性 対 恥・疑惑						
I	乳児期	基本的信頼感 対 不信任感							

図1. Eriksonの精神分析的個体発達分化の図式 (Erikson,1950)

面談の内容は、表1のとおりである。それは、島袋先生の陶器作りをコアとした生涯の物語である。面談にあたって、何よりも先生ご自身の語りを大切に受け取るように心した。1回の面談が終わると、それをもとに考察し、次回は私の解釈を島袋先生に示し、先生ご自身の考えを伺いながら深めていくという形をとった。1回の面談は、約2,3時間であり、本論文の作成までに、3回の面談を行った。

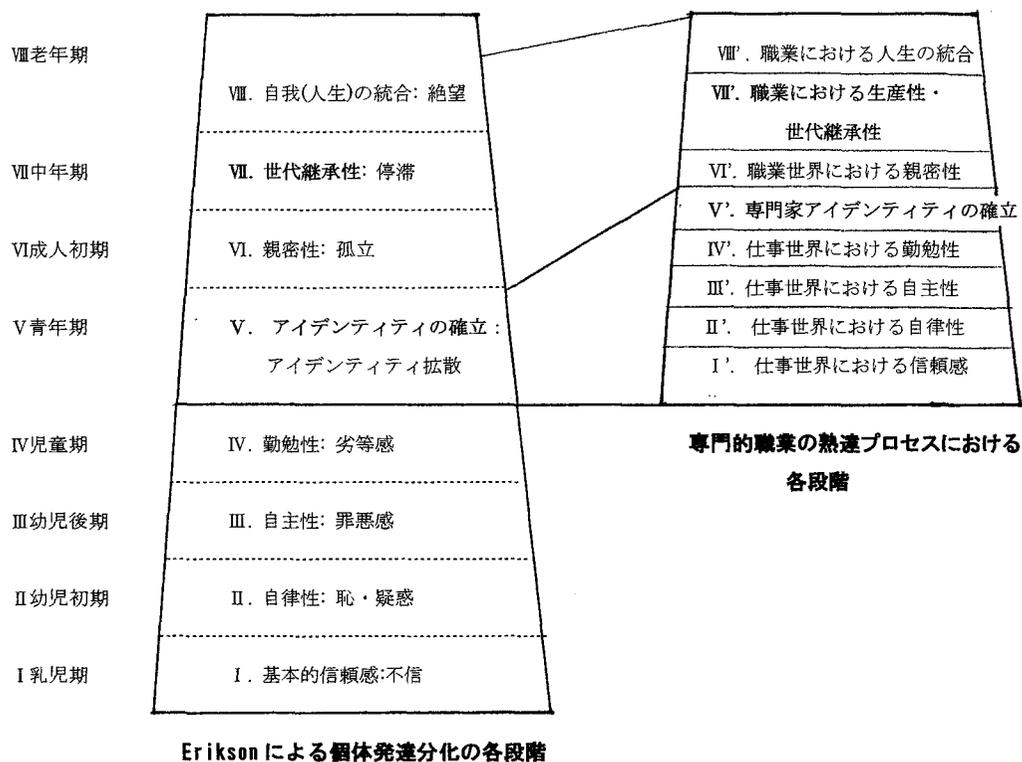


図2. ライフサイクルおよび専門的職業における心理社会的課題の体験過程の関連

### 島袋常秀教授に聴く陶器作りの仕事とその継承

#### 1. 生育環境の中で身についたもの

##### (1) 壺屋の歴史と風土

はじめに、島袋常秀氏の人と仕事の基盤をなす沖縄の焼物の歴史を簡単に紹介したい。沖縄は本

土とは異なる固有の文化をもち、12-16 世紀頃から海上交易が盛んであり、中国や東アジア諸国から多様な焼物が流入した。17 世紀には、朝鮮や中国の陶工との交流によってその陶技法も伝わっている。

1682 年、琉球王府は、沖縄の各地にあった窯場を壺屋に統合し、ここから壺屋焼の歴史が始まる。島袋家もその 7 つの宗家の一つである。一時期、陶器作りに携わっていない時期もあったが、続いていけば島袋常秀先生は 13 代目にあたる。大正から昭和にかけて、濱田庄司や河井寛次郎がしばしば沖縄を訪れ、壺屋で作陶した。昭和 14 年には柳宗悦をはじめとする民芸運動の同人が沖縄を訪れ、以後、王国時代の壺屋焼は、「用の美」を表わす焼物として高く評価され、注目されるようになった。この民芸運動の影響を受けて、壺屋の陶工たちが新たな道を模索し始めた矢先、日本は第二次世界大戦へ突入し、沖縄は凄惨な地上戦を経験することになる。激しい沖縄戦の後、深刻な物資不足に

## 表 1. 面談の内容

---

### (1) 生育環境の中で身についたもの

- ・ 生育環境がすでに陶器職人の世界であった中で、将来の職業を意識する以前に身についた資質は何か。

### (2) 青年期のアイデンティティ形成

- ① 「陶器職人になる」ことの主体的な選び取りはどのようなものだったのか。
- ② 大きな転機として、26 歳(1975 年)で独立、39 歳(1987 年)で読谷へ工房を移転と、沖縄県立芸術大学教員に。この意志決定の意味はどういうことだったのか。  
その後の自分の変化について。
- ③ そのプロセスの中でのプロとしてのアイデンティティの確立、問いなおし、深まりの体験について。

### (3) プロの陶器職人としての仕事について

- ① 陶器作りの信念
- ② 自分ならではの仕事への意志、これらの姿勢と発想はどのように生まれてきたのか。
- ③ 「熟達」は、どのように達成されるのか。
  1. 技能について。
  2. 熟達のための研究・実験・施行錯誤。
- ④ 発想や作品のイメージの変化
- ⑤ 発想・イメージが作品に結実するプロセス

### (4) 次世代に伝えるものと継承の仕方について

- ① 何をどのように伝えるのか。
  - ② 次世代に示すものは何か。
  - ③ 継承の実際について。
-

陥った沖縄に、貯蔵用の甕、壺、日用の食器、厨子甕などを真っ先に提供したのが壺屋だった。1945年末にはすでに陶器生産が開始されている。しかし戦後は本土から移入された陶磁器に押されて日用品としての地位が奪われた時期もあった。一方で、壺屋焼の美術工芸としての評価は上がっていた。1985年、金城次郎氏が陶芸(琉球陶器)の部門で重要無形文化財保持者 人間国宝に認定されたことによって、沖縄の陶器はさらに注目されるようになった。

1970年代になると、壺屋は住宅密集地になりも登り窯の煙が煙害とされ、使用できなくなった。現在は、多くの陶工がガス窯に転換して、300余年の壺屋の歴史を守っている。一方、登り窯による作陶を志す陶工は、読谷村に移住し、ここでも現在多くの陶芸家が製作を行っている。1986年には、沖縄県立芸術大学が設置され、新しい世代の陶芸家も活躍を始めている。

島袋常秀先生は、このような沖縄の焼物の歴史の中で生まれ育ち、壺屋の伝統を確実に継承しながら、さらに新しいものに意欲をもやす陶芸家である。読谷村の常秀工房の陶主であるとともに、沖縄県立芸術大学教授でもあり、沖縄の焼物の生成と継承の要の立場におられる。

## (2) 母上のごこと

### 1) 壺屋の守り神としての母君

心の発達について考える時、私たちはどうしても、その人の母親、父親に関心をもたずにはおれない。母上はどのような方だったのか。島袋先生の母上は現在、95歳で健在である。母は、3年前に92歳で引退するまで壺屋の祭祀者であり、壺屋の町の精神的土台を支える役割を長く担っていた。島袋先生の母方の祖母もまた、同じく祭祀者であった。祖母は非常に頭のよい方であり、経済的に貧しく寺子屋に通えない子ども時代に、寺子屋の外から話を聞き、空で覚えて勉強したという。独学で「天然こよみ」を作り、陶器のできばえをも左右する登り窯の火入れの日などの助言も行っていった。常秀さんの母君も、その母親の能力を受け継いできわめて頭のよい人であった。そして、祭祀者ならではのすぐれた直感の持ち主であった。

島袋家は、5人の男の子と3人の女の子の8人のきょうだいのいる大家族であった。一般的に陶工の家庭は貧しく、そのほとんどが中学校を卒業すると、陶工見習いとして窯元に弟子入りした。しかし、島袋家は何よりも教育を重んじ、戦前・戦中・戦後の厳しい時代に5人の男の子はすべて大学を卒業している。その教育費の工面もすべて母君の才覚であった。常秀先生は、その教育費の捻出のために、壺屋の陶工の家庭で、私の家はずっとも貧しかったと笑う。

### 2) 「名乗り頭」の不思議と「恵みの珠」

父上は、陶工の仕事で食べていくのは大変だからと、子どもたちには陶工ではなく、教師や公務員になることを勧めた。その証拠に、常秀先生の3人の兄君は、すべて「文」の一字の入った名前であり、長兄、次兄は教師になっておられる。ところが、下の2人は、「常栄」「常秀」と父親の「常」の一字をとって名付けられている。そしてこの2人は父と同じ陶工という職業につき、成功をおさめている。母は直感的に子どもたちの適性を見抜いていたのではないだろうか。

私は、常秀先生の妹さんのご案内で、一度だけ、母上にお目にかかったことがある。豊かな白髪と笑顔、はりのある美しい声が非常に印象的な方であった。拝願所(ウガンジョ)での祈りはさぞや

心に響く迫力のあるものだったであろうと思った。

沖縄地方には、今日でも毎年正月には、ユタに家族全員の運勢を占ってもらう習慣がある。また新しく誕生した子どももユタに占ってもらう風習がある。島袋家に5人目の男の子として常秀さんが生まれた時、両親はユタに常秀さんの将来を占ってもらった。ユタは、母に向かって「あなたは『恵みの珠』を授かった」と述べたという。常秀さんの両親はその後も、時々、このことを常秀さん本人や家族・親戚が集まった時に話したという。

このエピソードから、私は、フランス哲学者 森有正が『バビロンの流れのほとりにて』の冒頭で述べている次のような一文を思い出す。

「一つの生涯というものは、その過程を営む、生命の幼い日に、すでに、その本質において、残るところなく露われているのではないであろうか。僕は現在を反省し、また幼年時代を回顧する時、そう信ぜざるを得ない。この確からしい事柄は、悲痛であると同時に限りなく慰めに充ちている。（中略）ヨーロッパの精神が、その行き尽くしたはてにいつもそこに立ち返る、ギリシアの神話や旧約聖書の中では、神殿の巫女たちや預言者たちが、将来栄光を受けたり、悲劇的な運命を辿ったりする人々について、予言していることを君も知っているであろう。幼い生命の中に、ある本質的な意味で、すでにその人の生涯全部が含まれ、さらに顕れてさえているのでないとしたら、どうしてこのようなことが可能だったのだろうか。」（森有正『バビロンの流れのほとりにて』p.3）

どのような世界に生を受けるか、そしてこの世に生まれ出た時、両親をはじめ家族にどのように迎えられるかは、人の生涯にとって重い意味をもっている。『恵みの珠』ということばは、常秀先生の家族と、もの心ついた常秀少年に明るい宣託として受け止められたのではないであろうか。常秀先生の人生を方向づけるもの、つまり、自分はこの世界に十分に祝福されて受け入れられているという基本的な受容の感覚を与えたであろう。

### (3) 父上のこと—モデルとしての父親—

常秀先生の父君 島袋常恵氏(1911-1996)は、今日でも轆轤と三彩の名人としてよく知られている。金城次郎、小橋川永昌、新垣栄三郎の「壺屋三人男」に続き、小橋川源慶、小橋川永弘とともに、「次世代の壺屋三人男」と称された名工であった。那覇市立伝統工芸館には、常恵氏の得意とした三彩平土瓶が展示されている。現在は兄上の常栄氏が継いでおられる島袋陶器所で、父は昼も夜も働く職人であった。常秀さんは、父上のことを「父は無口で仕事ばかりしていた」と記している。口数の少ない、仕事に打ち込む典型的な職人だったと思われる。現在もなお、戦前からの姿を残す島袋陶器所は、自宅に隣接したそれほど広いものではない。父は、作りかけの器を自宅まで持って帰り、食事をしながらも仕事をしていた。常秀さんは、父親の働く姿を、文字通り、日夜眼近に見ながら成長する。

父は、陶器作りについて何も教えなかった。しかし、陶器作りという父の仕事は、常秀少年から

見ると魅力的な仕事であった。まず、轆轤という面白い道具があった。父は、轆轤の名手であり、自在に轆轤を挽いて成形していく。常秀さんは、その父親のそばで、父の仕事、しぐさをじっと見ている。「このように手を使うとこうなる」と見ていて、父が轆轤を離れた隙にさっと、その座に座って自分でやってみて覚えたという。この観察力は、驚くばかりである。そして、8歳の時には、蹴り轆轤を自在に操り、毎年秋に行われるカーミヌーブ(陶器の早作り競争)の前座で、轆轤を挽いて見せ、その技に人々は感嘆したという「伝説」が残っている。

こうして父の仕事ぶりは、常秀さんに決定的な影響を与え続けた。「幼い頃から見てきた父の仕事が、そのまま体に入っていった」と常秀先生は述べている。「家でござろろしているのは性に合わない」と、現在も、大学から帰宅後、工房で深夜まで作陶するという。父の仕事ぶりがそのまま踏襲されている。そして、大学を卒業する頃には、陶器作りのあらゆる技を身につけていた。

大学卒業後は父親の工房へ入り、さらに腕を磨いた。常秀先生自身、「よその工房へ入ってもよかったのだが、あまりその必要を感じなかった」と言われる。父の工房ではあらゆる技術を学ぶことができたからである。

#### **(4) 成長期の経験の意味するところ**

この成長期の経験について、Erikson の図式(図 1)にしたがって考察してみたい。結論から先に述べるなら、Erikson の図式に示された第 I 段階から第 IV 段階のアイデンティティ形成の土台となる資質は、余すところなく経験され、獲得されている。ただ厳密に述べるならば、Erikson の第 I 段階(乳児期)の心理社会的課題である「基本的信頼感」と、それにつづく第 II 段階 幼児初期以降の段階の課題は、少し性質を異にしている。「基本的信頼感」は、生まれ出た世界の心理的環境が深く影響する、全く個人の意志の入り込む余地のない運命的な次元の問題だからである。

##### **1) 生まれ出た世界と「基本的信頼感」**

島袋常秀先生は、終戦後 2 年半後の 1948 年 3 月のお生まれである。当時の沖縄の惨状は、今日数多く出版されている戦争写真集が克明に物語っている。さらに沖縄は、アメリカの統治下にあった。しかしながら、壺屋は奇跡的に焼け残った。アメリカ軍は、日々の生活に使う器すら満足にならない人々の生活の窮状を見て、1945 年 11 月には、収容所から陶工を壺屋に戻し、陶器製作を始めさせた。壺屋と陶工は、沖縄の復興の象徴的役割を果たしたと考えられる。このことは、壺屋の職人に大きな誇りを与えたであろう。常秀さんは、幼い頃から自分の周囲には、陶器職人しかいなかったという。常秀少年の目に映った世界は、貧しい生活ながらも誇りのある光景ではなかっただろうか。このような集団的アイデンティティが、何か「人間の意志と誇り」として言葉にならない力を熟成したと考えられる。

私の生まれと育ちは、広島である。私自身は終戦後 10 年が過ぎ、ある程度の復興が進んだ頃に生まれ、また幸いに被爆地広島市からは少し離れていた土地であったため、家族には被爆者はいない。しかしながら、原爆投下後の広島の光景は、成長期や成人後も幾度となく目に触れ、いつの頃からかそれは、心の原風景の一つとなった。広島の戦後は、予告なしに突然襲われた受け身的な死の世界である。それに比べて、壺屋の戦後の風景は、何か人間の主体的で肯定的な意志と誇りが感じら

れる。このような厳しい生活ながらも肯定的な人間性の感じられる集団的アイデンティティは、後の常秀先生の生き方の下支えになったであろう。

そして、すでに述べたような名のり頭と「恵みの珠」は、常秀さん個人の基本的信頼感の土台になったであろう。

## 2) 成長期の心理社会的テーマはどのように体験されたのか

Erikson(1950)の図式(図1)の第Ⅱ段階にあたる幼児初期以降の各時期は、人間の主体的な意識・意志が明確な意味をもつようになる。各段階の心理社会的課題と心(=自我)の発達における意味は、次のようなものである。

### ①「自律性」：「法と秩序」というその世界のルール

Erikson が第Ⅱ段階 幼児初期の心理社会的課題として挙げたのは、自律性である。これは、外からの力を受け入れ、自分の衝動を統制する枠組みを内在化していくことである。この外からの要求と自分の内からの要求のバランスをとることは、非常に難しい心の作業である。換言すると、自律性とは、自分が生きている世界には、決まり・ルールがあることを心と体で学ぶことである。

### ②「自主性」：「まねて作る」という具体・自分でやってみる面白さの体験

Eriksonによれば、3,4歳から5,6歳に成長した幼児後期(第Ⅲ段階)の心理社会的課題は、「自主性」である。自主性とは、幼児初期の外的、内的な力を統制できる能力を獲得した後、自分の要求を表現できる力である。外的、内的なバランスを保ちつつ、自分が主体的に行動できることである。この時期に幼児の心の中には、理想的原型ともいうべき、社会的価値や秩序に関連した要素が形成される。幼児は、日々の遊びをとおして、父親、母親のまねをし、男の子は父親「らしく」振る舞い、女の子は、母親「らしく」ふるまって、「自分」というものの土台を形成する。

### ③「勤勉性」：繰り返す作業による有能感の生成

第Ⅳ段階 児童期の子どもの心理社会的課題を、Erikson は、「勤勉性」と呼んだ。これは、学童期の子どもが勉学に励む姿である。内的な知的な関心と外からの要求のバランスがとれて育ってくるものが「有能感」である。「自分は自分なりにやっていける力がある。そして学ぶことはおもしろい」という感覚である。この有能感は社会の中で生きていく上で欠かすことのできないところの力となり、支えとなる。

Erikson の心理社会的発達の視点から見ると、常秀さんの幼児期・児童期においてすでに、自我の発達と並行して、陶器職人としての基盤の発達がみごとに進んでいる。それは、「(3)父上のこと」で述べたとおりである。

まず、専門的仕事における「自律性」とは、その仕事世界のルール、つまり「型」・「技」という基本を覚え、身につけるということであろう。常秀さんの成長期を見ると、仕事世界における器作りの「型」を身につけることが、ごく自然に進んでいることは驚きである。常秀さんは、すでに少年期に、器作りの技はかなりのところまで習得していた。

次に、自発的にやってみて「おもしろい」と感じる体験である。子どもから見ると、器作りは魅力的な仕事であったことは想像に難くない。まず、轆轤という面白い道具があった。その轆轤の上

で、土のかたまりがみるみる具体的な形になっていく。器というわかりやすい具体的な形も、認知発達における具体的な操作の段階にある児童期の子どもにとって、最も適合していたと思われる。そして、すでに述べたように、常秀少年は、「このように手を使うとこうなると、父の仕事をじっと見ている、父が轆轤を離れた隙に自分でやってみる」と、父の仕事を常に真剣に観察し、やってみて身につけていった。

常秀さんは、ものころをついた頃から、土に馴染んで成長した人である。小さい頃から土でロボットや動物のミニチュアやシーサーを作るのが好きだった。それを店に並べておくと、しばしば外人が立ち寄り、おもしろいと言って買ってくれた。こんなものが売れるのかと驚きながらも励みになったそうである。

ものづくりという具体的な作業を自分でやってみるという「自主性」の課題、何度も何度も同じ作業を繰り返すことによって、その技を身につけ、自分なりにやっていると実感するという「勤勉性」の課題や、そこから得られる有能感も体得されている。単に器作りという仕事の技だけでなく、現在も工房で深夜まで作陶するという仕事に対する打ちこみをはじめとして、職人としての仕事ぶり・生活・生き方そのものも、受け継がれている。

自分が何者になるのか、どのように生きていくのかというアイデンティティのテーマが意識されるはるか以前に、常秀さんは、「このように働いてこのように生きていく」という陶器職人の生活が深くしみとおっていた。

## 2. 青年期のアイデンティティ形成

### (1) 陶器職人という職業選択

青年期のアイデンティティ形成は、成長期に出会ってきたさまざまな人との同一化によって得られた特質を主体的に取捨選択して、「自分」というものを形造ることである。自分はこの方向で生きていくと意思決定し、その世界に積極的に打ちこんでいくことである。職業選択にあたっては、親の職業や成長期にふれた他の職業も少なからず影響を与える。常秀先生の場合は、青年期の職業選択はどのように行われたのであろうか。

すでに述べたように、父上は陶器作りで食べていくのは大変だからと、子どもたちには陶器職人になることを勧めなかった。後を継いでほしいとは一言も言わなかった。しかし兄たちが教師という職業を選択する中で、常秀さんは「迷うことなく」陶器職人の道を選んだという。シーサー作りの第一人者である兄の常栄氏は、大学を卒業後、何年かは会社勤めをした後、陶器作りの仕事に入られた。学校を卒業してすぐに陶工になったのは、常秀さんだけである。なぜ、陶器作りを自分の「仕事」にしたのか。それは、「おもしろい」と感じたことが、その決定的な動機だった。このことについては、後述して考察したい。

自分の生き方に対するこの意思決定は、どういうものだったのであろうか。小・中学生のころは、野球少年だったという。が、中学3年生頃から陶工の仕事を、将来の仕事として考え始めた。高校では美術部に所属したが、それは将来の仕事を見据えてのことであった。そして、琉球大学美術工芸学科に進学する。琉球大学が、沖縄の陶芸に果たした役割は大きい。これについては、本論の目的

ではないため、割愛するが、常秀さんも、大学で柳宗悦の理論や島袋常孝氏による釉薬の研究などを学び、「沖縄にもこのような独特のすばらしいものがあつたのか」と感銘を受けたと語っている。

父の工房では、皿、マカイ(椀)、カラカラ(酒器)、チューカー(急須)といった日用の食器のみでなく、厨子甕、ゆし瓶、シーサーまで、あらゆるものを作っていた。父の工房でその技を学び、生産に携わり、大学ではその裏付けとなる美術工芸学を学び、常秀先生の学生時代は、陶工としての理論と実践がレベル高く身につけていった。そして、大学卒業までにほぼすべての技法を身につけていた。

大学卒業後は父の工房へ入る。常秀先生は、このことについて、他の工房へ入ってもよかったのだが、その必要を感じなかったという。父の工房ではあらゆる技術を学ぶことができたということであった。後に、39歳の時、沖縄県立芸術大学が新設された時、教員として採用され、今日に至っている。陶芸専攻の学生の教育ができるのは、父の工房でありとあらゆる技法を学ぶことができたからだと言っておられる。

私たちは、職業選択についての試行錯誤や模索をせず、親の職業を選択する青年を”Foreclosure”「早期完了」と呼ぶ。他の可能性にチャレンジしたり、試行錯誤の経験が乏しいことから、後の躰きに対して弱いとされる。一方、試行錯誤の末に、最終的に親と同じ職業を選びとったならば、それは「アイデンティティ達成」である。

常秀先生は、「他の仕事など考えたこともなかった。それほど父の仕事は魅力的で、轆轤を使った仕事は楽しかった」という。経済的な豊かさはあまり期待できないことは、この道を選ぶことに障害にはならなかった。それは、陶器作りそのものをもっと深めたいという強い意志による積極的な選択であった。こういうアイデンティティ達成の姿もあるのである。

そして、26歳のときに父の工房から独立し、壺屋に常秀工房を設立する。大学卒業4年後のことである。父に独立したいと言った時、父は、「ああ、いいよ」とあっさり認め、2人の陶工をつけてくれた。当時、金城次郎窯が読谷村に移転し、その跡地で始めた新しい門出であった。常秀工房の設立にあたって、常秀さんは、日用の食器を中心に作る工房にしたい、沖縄本来のやきものを取りもどしたいと考えた。後述するように、この2つは、常秀さんの自らの仕事に対する信念——代々続いてきた沖縄の陶工の家庭に育った職人としてのアイデンティティが鮮やかに現われている。当時は、厨子甕やゆし瓶などの生産を主とする工房が多かった。戦争によって墓も破壊され、厨子甕の需要は多かったからである。それに対して、常秀さんは、日常の食器を中心に作る工房にしたいと考えた。これは先を見通した選択だったようで、大阪の間屋が製品を引き受けてくれるようになり、いくらでも売れた。しかしながら、「これだけ働いているのにもうからない」というのが、正直なところだったという。

## (2) 中年期の入り口での転期

そして、39歳の時、常秀さんの人生に大きな転機が訪れる。第一は、沖縄県中部の読谷村への工房の移転であり、第二は、沖縄県立芸術大学創立と同時に、講師として採用されたことである。

1970年代になると、壺屋も民家が増え、登り窯の煙が煙害として問題にされるようになった。登り窯で本格的な作陶をしたいという陶工は、沖縄県中部の読谷村へ窯を移すようになった。これは、

アメリカ軍基地から返還された土地に、読谷村が窯元を誘致したことによる。後に人間国宝となる金城次郎氏も、壺屋から読谷に移り、登り窯を築いて作陶を始めていた。1987年にその金城次郎窯が修復される時、常秀さんは、自分の窯を増設してもらうために耐火煉瓦をもって次郎窯に参加した。これを機に、常秀工房は、壺屋から読谷に移転することになり、金城次郎一門の共同窯に加わるようになった。これは、金城次郎さんと親交の深い友人の曾根信一氏が、常秀さんの共同窯へ参加を頼んでくださったことによる。常秀先生自身、これはきわめて幸運なことだったと述べている。金城次郎窯は、常秀さんが加わってから6連房の窯となった。

現在、読谷村には40以上もの工房が集まり「やちむんの里」と呼ばれている。常秀工房は、そのやちむんの里の入り口にあり、深々とした森に包まれた金城次郎窯はその奥に位置する。こうして広々とした工房が築かれ、本格的な作陶が始まった。常秀工房は、読谷村に移転したことによって、登り窯を中心とした仕事となり――工房には、穴窯もガス窯もあるのだが――、ガス窯とは異なる焼成にチャレンジできるようになった。スタッフも次第が増えて、仕事の幅が広がっていった。

第二に、沖縄県立芸術大学の講師として採用されたことも、常秀先生の専門家としての人生に大きなプラスの影響を与えたと思われる。沖縄県立芸術大学は、沖縄固有の風土によって培われた個性的な芸術文化の継承と創造と、それらを担う人材の育成を建学の理念として1986年に開学した。常秀先生は、その開学当初から関わった。初期の頃の大学は規律も緩く、工房との両立は十分可能であった。最近では、大学改革などのため「どんだんきつくなっている」とのことであるが、これは、我が国の大学のいずれもそうであろう。

大学教員としてのポストを得たことによって、常秀先生の専門的世界は大きな広がりをもった。県立芸大には、日本各地から非常勤講師として、一流の陶芸家が来学した。常秀先生は、学生と一緒にそういう人々の作品や授業の仕方にふれることができたことは、大きな刺激になり得難い収穫だったという。他の陶芸家との交流は、プロとしての熟達に大きな刺激を与えた。この点については、次の3-(2)-③で改めて述べたい。

こうしてプロフェッショナル・ワークの基盤が築かれて以降の、常秀先生の「仕事」は、壺屋の伝統を確実に受け継ぎながら、独自の美感を表現した作品を生み出している。

### 3. 島袋常秀氏のプロフェッショナル・ワーク

さて、島袋常秀先生の専門家アイデンティティの中核をなす「仕事」について考えてみたい。常秀先生の作品は、沖縄の伝統的紋様や美しい自然を素材とした独特の絵付けが特徴である。日々の生活で使われる食器も、一つひとつ丁寧な手作りであり、何か懐かしさと温もりが感じられる質感がある。こんな美しいものを創り出す人はどんな人なのだろうという憧憬を与えずにはおれない。まさに、沖縄では知らない人はいないほどの陶器作りの第一人者である。

#### (1) 父の仕事から自分の仕事への転換

常秀先生の父上の常恵氏は、日々の生活に必要な陶器を何でも生産する「職人」であり、早作りで有名な名工であった。父の世界は、あくまで日常の器の生産が主であり、自己の美感を追求し新しい作品にチャレンジすることは少なかったという。

それに対して常秀先生は、自分の作品には、他者からいろいろな刺激を受けて取り入れたいという。父は、先代から受け継いだ技の範囲で仕事をした。それに対して自分は、伝承するものはきちんと受け継ぎ、さらに発展させていきたいと語る。この常秀先生ならではの「継承」と「発展」は、どのようにして得られたのであろうか。

## (2) プロの陶器職人としての仕事について

島袋常秀先生の仕事のオリジナリティについて、私は次の2つの点から考察してみたい。第一は、熟達のプロセスについて、第二は、常秀先生の陶器作りの土台をなす信念ともいべき沖縄人としてのアイデンティティと愛着についてである。

### 1) 「熟達」はどのように達成されるのか

専門家アイデンティティの形成にとって中核となるものが、そのプロとしての「熟達」である。職人の熟達のプロセスはどのようなものなのであろうか。そこには、どのような心理的要因が関わり、どのような心的プロセスとして捉えられるのであろうか。まず、常秀先生の体験をたどってみたい。

#### ① 持続のエネルギーを支えるもの

一つの世界に身をおき、その仕事に打ち込んでいく営みを支える、もっとも根っこにある力は何であろうか。常秀先生の場合、それは、陶器作りが「好きだという感覚」、「おもしろいと感じること」であった。これまでの人生の中で、それが揺らいだことはないという。この「おもしろいと感じる感覚」は、常秀先生の場合は、すでに幼児期・児童期に体験されている。その原点は、父親の働く姿をじっとみて、自分もやってみて確かめること、繰り返し繰り返し集中して同じ作業をすることで、手が「型」「技」を覚え、身にしみこむこと、そして自分はこれがやれるという「有能感」の実感である。このことは、すでに1-(4)-2)で述べたように、自我の発達段階に驚くほど適確に合致している。こうして、この感覚は、生涯にわたって活力の源となり、仕事を下支えするものとなった。

#### ② 基本としての「型」：「手が覚える」技

常秀先生によると、陶器作りの仕事の基本となるもの「型」である。これは技法と言い換えてもよいであろう。「うまい人の『手』を覚える」ことが最も大事だという。「先生の手」を自分のものにする。型・形を身につけないと、自分の仕事は広がっていかない。型をしっかりと身につけ、それを土台にして、自分独自のものとしてプラスしていくことによって、個人のオリジナリティが広がっていくと言われる。

本研究の構想の中で考えた、どんな専門の仕事においても、基本的なものが決定的に重要でありその基本・型を自分のものにした人々は、自己の内的な創造性を生涯にわたって発揮し続けることができるであろうという仮説的イメージは、常秀先生の実体験によって裏付けられたことになる。

#### ③ 他の名工の仕事から受ける刺激の主體的な内在化

常秀先生は、古い作品や他の陶芸家の作品を見ることによって、非常に有意義な刺激を得たとい

う。その体験の中でも、決定的な影響を受けたのが、浜田庄司氏である。浜田庄司氏(1894-1978)は、よく知られているように、柳宗悦や河井寛次郎らとともに、民芸運動の中心となった人である。栃木県益子に窯を構え、1955年には、陶芸の中でも「民芸陶器」という部門で初めて人間国宝となった。浜田氏は、大正7年(1918年)、24歳の時に初めて沖縄を訪れ、無名の作家たちが作り出す日常使いの陶器や織物に深く感銘を受けた。その後、彼は、何度も沖縄を訪れ、壺屋の陶工たちとの交流を深めた。浜田氏は、沖縄を訪れると、壺屋の新垣家へ滞在して、現在は重要文化財に指定されている新垣家の細工場で作陶した。因みに、新垣家は島袋先生の実家のとなりである。当時、陶工たちは浜田氏が来ると新垣家を訪れ、指導を受けた。常秀先生自身も、浜田庄司氏が陶器のどこに魅力を感じ、陶器作りをどう展開しているのかを見て、多くを学んだという。

浜田庄司の作品は、他の陶芸家とは異なるイメージの広がりがあった。その一つが、呉須蠟抜き技法であり、浜田氏は、益子での作陶に取り入れていた。常秀先生は、浜田氏の作品を見て強いインパクトを感じ、氏の赤絵、線彫り、染付、呉須蠟抜きなどを自分の作品にとり入れてみたいと思った。こうして呉須蠟抜き技法を用いた作品は、常秀さんの若い頃から今日に至るまで、代表的なものの一つになっている。この交流は、浜田氏が一方的に沖縄の陶工を指導したのではなく、浜田氏自身も、沖縄の陶工による作品に感銘を受け、自分の作品に多くとりいれている。因みに浜田庄司氏が61歳で人間国宝となった時、常秀さんは7歳であった。その後、浜田氏が84歳で亡くなるまで、常秀さんは、少年期・青年期を通じて、浜田氏と、河井寛次郎、バーナード・リーチなど彼の連れてくる一流の陶芸家を間近にみて刺激を受けている。

この交流をはじめとして常秀先生は、本土から来た陶芸家が、沖縄の特質をどのように感じているかを学びとり、そのことから逆に刺激を受けたという。そして、沖縄でしかできないもの、沖縄の作陶の基盤になるものを活かす工夫をしてきた。たとえば、沖縄で多くとれる赤土をもとに成形し、化粧がけの後に絵付けをするという工法や、沖縄特有の釉薬の生かし方など、探究の課題はいくらでもあった。

常秀先生のこの体験は、専門的仕事におけるオリジナリティ、独自の仕事を生み出す要件として重要であると考えられる。研究の世界でも芸術の世界でも、オリジナリティは、ただ自分の発想が湧くのを漫然と待っていただけでは生まれない。先人の仕事を精緻に深く見ること、そして主体的に自分の問題意識をもって、先人の仕事をしっかりと見ること、その、どこでどのようなインパクトを受けるかが、きわめて重要である。それは、自分の主体的な問題意識と鍛錬によって耕してきた自らの世界に、先人の刺激が加わることによって結晶が形成されるような、何か液体と触媒の反応のようなイメージを、私は感じる。

#### ④ 美的感覚の生成

職人としての仕事は、「型」「技法」を習得することが基本である。それはそのとおりののだが、「技」より重要なのは美的感覚であると常秀先生は言う。美的感覚は、どのように醸成されるのであろうか。

常秀先生の作品には、沖縄の文化や自然を取り入れたものが多い。ミンサー織の絵柄、デイゴの赤い花やガジュマルの長い蔓、最近では、月桃やサトウキビなども絵付けのデザインに取り込まれて

いる。身近なものを素材にし、それらを組み合わせたものが多い。

絵付けのデザインは、基になるパターンを大切に、同時に新しいものも工夫する。デザインについては、常に考えていても、新しいイメージが簡単に生まれるわけではない。「絵付けのデザインは簡単ではない、頭が痛い」と、常秀先生は笑う。紋様をどう描いてよいか、わからなくなる時がある。こういう切羽詰まった時は、無理をせずに今までやってきた基本の絵付けに戻る。かつて良いと言われたものにもどると、すでに経験してきたものなので、その行きづまりを突破することができたという。紋様の基本はそれほど多くはないが、絵付けを工夫すると新しい雰囲気が生まれてくる。デザインのオリジナリティは、このような、繰り返し繰り返しの工夫と努力の道行きの中から生されるものである。

工房への注文に応じながらも、大皿を作ることが、今日の常秀先生の最も意欲的に取り組む仕事となっている。最近の展示会では、イッチン、刷毛目などテーマを絞って開催すると言われる。その方が、一つの技による表現の探究が深まるからである。

現在の常秀先生の最大の関心と関与は、大皿・尺皿の制作である。年4回、金城次郎窯に火が入る。1回の登り窯に、先生渾身の尺皿、大皿が約10枚、入る。大皿作りは、「今一番のもの」づくりであり、もっとも創作意欲がかき立てられる充実した時であるという。

登り窯は、自然の窯といわれる。窯の炎は、酸化焼成が中心であるが、時に中性焼成や還元焼成になったりする。用いる薪も、松と杉とでは炎の巡りが異なる。そして炎の巡りによって釉薬の色が変化する。窯出ししてみると予想と異なることも少なくないという。大皿や尺皿が窯から出てきたときには、「やったー」という得も言われぬ達成感と充足感が体験されると、常秀先生は語っておられる。この渾身の尺皿・大皿作りで体験される感覚が、現在の常秀先生のアイデンティティの中核を支えているのである。

## ⑤ プロになっていく感覚とコア・アイデンティティの生成

常秀先生自身、陶器作りの仕事を「やれる」ようになった感覚を初めて味わったのは、26歳で独立した時であるという。成長期からある程度、やれる気持はあったが、これで食べていけるかどうかは、独立してみないとわからない。そして、実際に独立した後の感覚は、「これだけ働き、売れている割にはもうからない」というのが実感だった。常秀さんは、始めは「職人」でやっていこうと考えた。しかしながら、日用の陶器を量産してもあまり裕福にならない。壺屋での10年余は、作家でもなく、職人でもなく、なんとなく中途半端な、両者のはざまで揺れている感覚があったという。しかし、こういう厳しい時代があったから、今日があると思えると語っておられる。

読谷村への移転は、その意味でいよいよ本当の独立の覚悟が求められる厳しいものだった。ここでやれる限りのことをやろうという、覚悟、区切りの時であったという。しかし見方を変えるならば、壺屋の10年余を経て、中年期の入り口に当たる39歳の時の区切りは、非常に良い時機であったかもしれない。技術的にはもう十分な腕前であった。大学と拡大した工房運営の両立は、体力的にも心理的にも厳しいものだったと思われるが、すでにのべたように、それは常秀先生にとってこれまで身につけた力によって、オリジナリティのあるキャリアが開花する最適期であったと思われる。

還暦を迎えられた現在もなお、常秀先生は、昼間は大学で教え、夜は夕食後、工房で一人、深夜まで作陶するという日々を送っている。工房へ来て自分の轆轤の前に座るときが、もともと自分らしい本当の自分であり、充実し安心し、集中できる時間であるという。若い頃からの陶工としての自分が、今日もなお、アイデンティティの中核をなしている。

島袋先生の仕事は、「陶工かつ研究者」というのがふさわしいと、私は考えている。それは、常に工房という現場で作陶を続ける実践家、「陶工」の姿と、身につけた技での作陶だけでなく、常に新しい世界を探求している「研究者」の姿の二つが統合されたあり方である。

沖縄県立芸術大学へ非常勤講師として招かれた陶芸家が、常秀工房を訪れ作陶することもある。浜田庄司氏の時代のような交流が、今日では常秀工房で継承されている。

## 2) 仕事に対する「信」と沖縄人としてのアイデンティティ

常秀先生は、「器は使われてこそ」、「沖縄の器は沖縄の土で」と言われる。そして、陶器の素材の土はもちろんのこと、木灰や珊瑚を焼いた石灰、鉄や真鍮、マンガンなどの釉薬の原料は、現在もほとんどすべて沖縄本島のものでまかなわれている。

また、呉須蠟抜貝紋、ミンサー織の紋様、赤絵など、常秀先生独自の絵付けは、沖縄の文化と自然をテーマにしたものが多く、大地に根をおろした安定感と温かさが感じられる。それらは、常秀先生の内的世界のポジティブな表現である。「作品は、世界を切り取り写すことだけでは不十分である。作者がその世界をどう見ているのか。作者の感性で、強調する。ゆえに作品は作者の心の世界・人格が投影されている」と、先生は言われる。作品に常秀先生の「心の世界や人格が投影されている」ならば、それは、沖縄人としてのアイデンティティが表現されているのではないであろうか。つまり先生の信念に込められた思いは、代々、沖縄で生きた人間、一陶器作りを家業とする家・土地で育った人間として、その根っこへの信頼感と肯定感が強く感じられる。

この自らの根っこへの信頼感、そして仕事に対する信という問題について考えてみたい。これは、常秀先生ご自身に限らず、沖縄 壺屋で焼物を生業とする代々の地域性、精神性と深く結びついていると思われる。

登り窯を用いたやきもの作りの仕事は、自然と一体となったものである。器は土と水から生まれ、火によって焼かれて完成する。まさに、土、水、火と一体になった技である。そのことから自然に対する敬意と祈りが生まれた。壺屋では、井戸はカーと呼ばれ、聖地となっている。壺屋全体が聖地であるといっても誤りではない。現在も、1年に8回、火の神、水の神に祈る祭祀がとり行われている。はじめに述べたように、常秀先生の祖母君も母君も、その村拜みの長(祭祀司)であった。一方、登り窯の火入れは、夜8時に行われる。ここで親方は、窯に泡盛と塩と米を供えて、「うまがしにそーり」(良い器を生まれますように)と祈る。このような仕事の儀式における祈りは、読谷村に移転後も継承されている。

このように、壺屋には300年余も陶器作りを生業とする職人が生活を営み、火、水、土に対する自然信仰は、陶工たちの共通の精神性を形成してきた。壺屋は一つの共同体であり、火、水、土の神によって守られた世界であった。そして、壺屋での祭祀は女性たちの仕事であった。

拝願(ウガン)の儀式では、「よい器が生まれますように。よい品になってよく売れますように」とまで祈りの言葉になっている。このように祈りの儀式は、厳しく現実的な意味合いももっている。登り窯が成功して商いに耐える器が得られるかどうかは、生活がかかった深刻・重大な問題であった。だからこそ、火の神への思いは強く、男性の陶工は窯で揉み、女性は村全体の生活の安定を揉み、壺屋の窯全体がうまくいきますようにと祈ったのである。

## 全体的考察

最後に、これまで述べてきたことを総合して、本研究の3つの目的について考察してみたい。

### 1. 専門家アイデンティティの発達プロセスと心理社会的課題

専門家アイデンティティの生成と継承に関する本研究の仮説的イメージは、専門家アイデンティティが達成されていくプロセスには4つの段階があり、青年期までの心理社会的課題は、専門的職業に参入した後、その仕事世界の中で再び繰り返されるであろうというものであった(図2)。

常秀先生との面談で得られた、職業世界での熟達のプロセスは、図3のような、質的に異なる特質をもった5つの層的段階にまとめることができる。5つの層的発達段階は、次のようなものである。まず、「仕事に対する信」が、その専門的仕事を持続していく意識的・無意識的土台となる。これに支えられて、「自発的にやってみるおもしろさの実感」と「固有の仕事世界の技・型を身につけること」が得られる。これらの持続した経験を基盤に、「この世界で『やれる』という感覚」、そして「この世界に立つ」ことが達成される。プロとして自立した後の営みは、さらなる研鑽による独自の仕事の探究と深化、そして次世代を育てながら、自らの仕事を継承していくこととなる。

この熟達のプロセスに見られる心理的体験を、専門的職業アイデンティティの発達段階としてみると、図3の左欄に記したようなEriksonの図式(図1)に示された第I段階から第VIII段階の心理社会的課題を読み取ることができる。

このように本研究の仮説は、常秀先生の体験プロセスの中で裏付けられたと考えられる。ただ、多くの人々は、青年期に一つの専門世界へ参入するのに対して、常秀先生の場合は、成長期の体験がそのまま専門家としての土台となっている。そして、基本的なアイデンティティ形成と専門家アイデンティティ形成のプロセスは、人生の早期から重なっている。島袋常秀先生の場合は、成長期のアイデンティティ形成と、陶器職人としてのアイデンティティ形成が、人生のごく初期から一体化して進み、レベル高く達成された生涯である。

### 2. 青年期のアイデンティティ形成

特に、生まれ出た世界に対する信頼感が、仕事に対する信につながり、成長期における父上への同一化が専門的アイデンティティ形成に直接的に結びついていることは、特筆に値する。

青年期に、それまでの成長過程において体験した様々な人や役割への同一化によって身についた自己の特性について、主体的な取捨選択と模索が行われない場合、それは早期完了と呼ばれ、脆弱

**第5段階**

専門的仕事  
のまとめ

**Ⅷ. 専門家としての仕事の  
完結・まとめ**

**第4段階**

専門家アイ  
デンティテ  
ィの継承

**Ⅶ. 専門化アイデンティテ  
ィの継承/ 次世代の育成  
専門的仕事の研鑽**

**第3段階**

専門家とし  
ての深化

**Ⅴ. 専門的職業の選択→  
専門家としての自立**

**第2段階**

特定の専門  
的職業の  
志向から自  
立まで

**Ⅳ. 仕事世界における  
勤勉性 (=有能感)**

**第1段階**

基盤となる  
自我形成

**Ⅲ. 仕事世界における自主性  
Ⅱ. 仕事世界における自律性**

**Ⅰ. 仕事世界に対する信頼感**

**Erikson 理論に基づく専門的職業の  
熟達プロセスにおける各段階**



図3. 専門的職業における熟達の質的変容のプロセス

なアイデンティティであるとされる。常秀先生の進路選択も外から見れば、そのように見える。しかしながら、先生の体験や意思決定をていねいにみていくと、常秀先生の青年期の職業選択には、多くの青年が体験する自己と社会のはざまでの試行錯誤ではなく、仕事世界の内側での真摯な試行錯誤と模索があったことがわかる。

陶器作りは精緻な手仕事である一方、体力の要する力仕事でもある。また、常秀先生の成長期や青年期は、まだ陶器職人の生活は経済的にも厳しかった。こういう厳しい側面を十分知りつつ、この仕事を選びとったことは、陶器作りのより本質的な探究をめざしたチャレンジ、ある意味では賭けのようなものであったと思われる。

### 3. 中年期のアイデンティティの変化と深化

専門的職業人に限らず、一般的に40歳前後から半ばにかけての中年期の入り口は、人生の危機期、転換期であると言われる。この時期は、人生半ばの峠に立ち、人生前半を振り返り自分の生き方、あり方、つまりアイデンティティの問い直しが行われることが多い。常秀先生の場合も、40歳前後の時期は大きな転換期であった。読谷村への移転と金城次郎窯への参加、そして沖縄県立芸術大学の講師就任である。この2つの出来事は幸運なことであったが、その半面、人生の中で最も活力を要する出来事であったと思われる。常秀先生自身、ここで自分のできる限りのことをやろうという「覚悟」が定まったと言われる。この人生の節目での体験も、選び取った仕事へのさらなる本質的探究を目指してのチャレンジと意味づけられる。

しかし、常秀先生の場合も、陶器職人・研究者として順風満帆の人生であったとは簡単には言えない。すでに述べたように、仕事世界の中で行き詰ったこともあるという。しかし、常秀先生の場合、その切迫した状況は、「基本へ返る」ことで乗り越えられている。この「基本へ返る」ことは、心理学的にみても重要な意味をもっている。危機的事態に遭遇した時、それを乗り越える力になるのは、これまでの発達段階において獲得してきた自我の力である。Eriksonの言葉を借りれば、図1に示した発達の各段階での心理社会的課題である。私は、専門的な仕事世界において、これらの心的資質を再び経験することが、専門家としての熟達を支えるのではないかと考えた。そして、それはすでに具体的に述べ、図3にまとめたとおりである。この熟達のプロセスは、見方を変えれば、仕事における危機を乗り越える力であるとも考えられる。つまり、オリジナリティの表現や展開に行き詰った時に支えとなるのは、これまで身につけた「技」であり、基本的な「型」であった。このような「行きつもどりつ」のプロセスは、人生に危機における心の発達において、しばしば体験されるものである。専門的職人の熟達のプロセスにおいても、この行きつ戻りつの過程が見られることは注目に値することである。

### 4. 心理臨床家と職人のプロフェッショナル・ワークにおける共通の特質について

心理臨床の仕事は、高度な科学的な仕事でありながら、時に「職人芸」、時に「アート」であるとも言われる。島袋常秀先生の人と仕事について考察を進める中で、心理臨床家と職人のプロフェッショナル・ワークには、いくつかの共通した特質があることが示唆された。

第一は、両者とも知的な仕事であると同時に、感性・イメージが重要な働きをしていることである。陶器職人の土づくり、釉薬の調合、焼成などは、まさに化学実験の様相をもつ。そして器の成形や絵付けにとって感性やイメージがきわめて重要であることは、すでに述べたとおりである。心理臨床家も、心理学研究者と同様に高い知的レベルが求められる。さらに来談者(クライアント、C1.)の心的世界を理解しイメージするための感性は、より重要な資質として求められる。

第二は、両者とも仕事に、その人の人間性が強く表われることである。陶器職人の場合は、自分の美感にもとづいて、器に自分の世界を表現するのであるから、それは当然のことであろう。心理臨床家は、来談した C1. のかかえている心理的問題の解決の過程に伴走し、より適応的に生きられるように専門的な立場から援助を行う。私は、心理臨床家の仕事は、いよいよのところ、その C1. がどう生きたいのかを理解し、それを支えることであると考えている。C1. の「生きたい人生」は見方によってさまざまであり、その支え方もいろいろである。それゆえに、心理療法の理論と技法は多くの学派に分かれている。心理臨床家は、それらのうち自分にもっともなじむものを自分のオリエンテーション(理論と技法)にすればよい。心理療法実践の具体は、こうして心理臨床家そのものの「人間性」とオリエンテーションによってかなり異なるが、C1. の福祉に益するなら、それはそれでよいのである。

このことは、専門家である「私」が、相手(=C1.)とその世界をどう見ているかにかかわる問題である。「私」が「C1.」をどう「見て」どう「理解し」、どう「かかわる」かを示す。この専門的営みは、職人の作陶が、ただ世界を切り取り写すのではなく、職人自身がその世界をどう見ているかが表現されることと、非常によく似ていると思われる。

第三は、仕事の現場性、つまり仕事の中核は研究室でも書斎でもなく、「現場」であるという点である。職人が常に轆轤の前で陶器を作り続けることが仕事の中心であることは言うまでもない。心理臨床家の場合も、常に C1. との心理面接の時間を中心に据えて、仕事をするのが重要である。今日の大学教員の場合、それはなかなか難しいことであるが、これを実践しなければ、「丘にあがった河童」になってしまう。島袋常秀先生の、大学と工房の両立はみごととしか言いようがない。「工房の轆轤の前に座った時が最も自分らしい充実した時間である」という言葉は、この現場性を深く実践しておられることから生まれたものであろう。

第四は、専門的世界での訓練の基本が、型・技を身につけることである点である。これは、職人や心理臨床家に限らず、あらゆる専門の仕事において言えることかもしれないが、心理臨床家の基礎訓練は、臨床心理学の知的学習とともに、心理療法の基本ルール、ロールプレイによる応答訓練、具体的な事例にもとづくスーパーヴィジョンなど、かなり厳しいものである。職人の場合も、技の巧拙は作品のできばえに直接的に影響するものであるから、技法の習得はきびしく要求されるものであるにちがいない。

しかし、これらの訓練の仕方は、職人と心理臨床家ではかなり異なるように思われる。職人の場合、親方は何も教えない。「見て習え」と言い、親方の仕事を観察して「技を盗み取って自分のものにせよ」という。それに対して、心理臨床家の教育・訓練は、指導者と初心者との1対1の、口伝のような趣きがある。

第五に、陶器作りと心理臨床の仕事の共通した魅力は、常に新しい世界に遭遇する驚きであり、新しい「生」に出会う喜びであると考えられる。陶工の心血を注いだ工程を経て、最後に器は登り窯に入り焼成される。器は、窯から出てくるまでどのような仕上がりであるかわからない。それはまさに、登り窯という胎内から器(=子ども)が生まれるイメージを連想させる。

心理臨床の仕事も、同じような特質を有している。心理面接の場で出会う C1. は、一人として同じ人ではなく、その心的世界も固有のものである。そして心理面接のプロセスを通じて、C1. の直面している心理的な障害、困難な問題や無意識的葛藤が意識化され整理され、C1. 自身も気づかなかった「新しい自分」が獲得される。一人ひとり異なるその心的プロセスを見続けることは、心理臨床家の仕事のもっとも大きな魅力である。このような共通性に関する問題については、次稿において考察することにした。

### 今後の課題

Profession の生成と継承に関する研究は、まだその途についたばかりである。本論は、その第一研究として、島袋常秀先生の生涯から壺屋陶器職人の専門家アイデンティティについて考察した。壺屋陶器職人の Profession の生成と継承については、次のような問題が、今後の重要な課題として残されている。

第一は、専門的世界への参入の時期による専門家アイデンティティ形成の相違である。常秀先生のように幼児期からその世界で育ち、土に馴染んで成長した人と、青年期に陶芸家を志した人、さらに成人期のある時期に職業の方向転換をして陶器作りの世界に参入した人では、そのアイデンティティ形成のプロセスや危機は異なるであろう。

第二は、Profession の継承を弟子の側からみた場合の特質である。現代の若手の陶芸家・陶工は、師から何をどのように受け継ぎ、自立していったのであろうか。

第三は、心理臨床家の熟達のプロセスとの比較検討である。すでに述べたように、心理臨床家の専門性も、職人のそれに類似した特質を有している。両者の比較検討を行うことによって、心理臨床家は、職人の専門の仕事から多くを学ぶことができると思われる。

この3つの問題について、今後、現場で深く打ち込み独自の仕事を重ねておられる方に直接、面談するという本研究と同じ方法で考察していきたい。

### おわりに

青年期以来、私は、成人期のアイデンティティの発達と危機について研究し、その心理臨床的援助の実践に携わってきた。しかしながら 50 歳の峠を越えると、自分自身の心と自分を取り巻く世界の見え方は、それまでとはかなり異なってくる。その一つが、中年期に一応のところ達成された専門家としてのアイデンティティは、次世代へどのように受け継がれていくのだろうかという新しい問題意識であった。二つ目は、自分のよって立つところ、自分の土台や根っこについて考察してみ

たいという思いであった。それは、私自身を含めて人間の自我形成の根と、もっと根源的な自分の立つ土台への関心でもあった。

我が国は現在、さまざまな分野で深刻な継承性の危機に直面している。時代の急速な変化の中で、専門的技術・技術や知恵、蓄積された経験の受け継がれなさ、「経験」の継承のむつかしさは、専門的職業に限らず、戦争体験、ハンセン病など、歴史の中で記憶にとどめるべき大きな意味をもつ現実でありながら、風化しつつある事柄にも言えることである。さらにそれは、次世代へ継承すべき活力、人間力、関係性形成力など、人間的な強さそのものにも当てはまる。私は、これまで自分自身関わってきた専門世界の中で、このアイデンティティの生成継承性を、具体的、実証的に研究できないだろうかと考えるようになった。本研究は、このような動機から始まったものである。

第二の動機は、青年期以来、心理臨床の実践と研究に携わる中で、心理臨床家の専門的アイデンティティの形成や熟達のプロセスは、職人のそれと近いものがあるように感じてきたことである。しかしながら、ものづくりの仕事は、私には最近まであまり縁のない世界であった。もちろん、これまでの人生の中で素晴らしい陶磁器や織物などに感嘆したことは少なくない。しかし、その作者の人生にまで思いをいたすことはあまりなかった。それは、それらの作品が、私の感動の入り込む余地のないほど別個の世界にあり、その作者と私との間にはつなぎようもない遠い距離があったからである。つまり、これまでの私の感動は、私と作者の関係性を希求する「二人称の感動」にはならなかった。

私が、島袋常秀先生のお名前を知ったのは、偶然のことであった。深い藍色の地に浮かび出たいくつもの小さな白地に貝のイメージが描かれた呉須鱗抜貝紋と呼ばれる大皿。沖縄の代表的な花である真っ赤なデイゴがいっぱい描かれた尺皿。ミンサー織の独特の紋様を組み合わせさせた赤絵の大皿……。特に、沖縄の伝統的紋様を組み合わせさせた赤絵の大皿を見たときには、私は限りない懐かしさと安心感、自分の幼いころの根っここの温かさに帰るような感覚を感じた。そのどっしりと安定した存在感と、器の前に立ちつくし、みとれてしまう美しさ。器からさまざまなイメージがわいてくる楽しさと不思議さ……。また、日々の生活で使われる食器も、一つひとつ丁寧な手作りであり、何か懐かしさと温もりが感じられる紋様が描かれている。こんな美しいものを創り出す人はどんな人なのだろう、一度お会いすることはできないだろうかという素朴な憧憬を私は抱いた。上に述べた自分を含めた人間の成長・発達への根っこへの関心と、職人の熟達のプロセスへの憧憬が、島袋常秀先生の仕事に出会うことによって、動き出した。

島袋常秀先生とその作品に対する私の憧憬は、その後、思いがけず現実のものとなった。島袋先生は、私の唐突な依頼を快くお受け下さり、沖縄県読谷村の常秀工房で、面談が実現した。そこで伺ったことは、すでにこの小論で述べてきたとおり、島袋先生の陶器作りをコアとした生涯の物語である。それは、常秀先生の固有の人生と経験でありながら、専門家アイデンティティの形成と継承性の本質を示す、極めて普遍性に富んだものであった。

初めての面談まで、私は島袋先生ご自身のアイデンティティ形成とお弟子さんへの継承の問題しか念頭になかった。しかしながら、壺屋の島袋陶器所のお店を守っておられる妹さんの石倉トミ子さんから、問わず語りに、母君がつい最近まで壺屋の村拜みの長(祭祀者)であったことを伺って、

私は心の深いところで感動した。そして、一つの仕事の生成と継承は、個人の意志や達成を超えて、もっと風土や歴史と一体となった世界を理解しなければならないと感じた次第である。

\*

なお、本論文での島袋常秀教授の呼び名は、文中の文脈の中で浮かんできたものを用いた。本稿は、島袋常秀先生にあらかじめ校閲をお願いし、許可を得て刊行した。

最後に、本研究にあたって自らの経験についておしみなく語り、研究のレベルをはるかに超えた貴重な体験と深い感銘を与えてくださった島袋常秀教授をはじめ、島袋常栄氏、石倉トミ子氏に心よりお礼申し上げます。またご家族の方々に対して予期せぬ非礼があったなら、心よりお詫び申し上げます。

## 引用文献

- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and society*. New York: W. W. Norton. (仁科弥生(訳)  
1977, 1980 幼児期と社会 1・2. みすず書房.)
- 森 有正 1978 バビロンの流れのほとりにて 森有正全集 第1巻. 筑摩書房.
- 岡本祐子 1994 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究.  
風間書房.
- 岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学. ナカニシヤ出版.
- 岡本祐子 2002 アイデンティティ生涯発達論の射程. ミネルヴァ書房.
- 岡本祐子 2007 アイデンティティ生涯発達論の展開: 中年の危機と心の深化.  
ミネルヴァ書房.
- 岡本祐子(編著) 2010 成人発達臨床心理学ハンドブック: 個と関係性からライフサイクルを見る.  
ナカニシヤ出版.

## 参考資料

- 平山郁夫(監修) 乾由明・大滝幹夫・金子賢治(編) 2003 人間国宝の技と美 陶芸名品集成  
第2巻 陶器. 講談社.
- 井上隆生 2006 壺屋の伝統を守る—島袋常秀—. 井上隆生 現代陶芸列伝. 風媒社, p. 118.
- 磯崎主佳 2006 島袋常秀の仕事. 島の文化誌 島たや, 第2号, Pp. 14-23.
- 那覇市立壺屋焼物博物館(収録) 2001 DVD 島袋常秀氏(未編集). 那覇市立壺屋焼物博物館所蔵.
- 那覇市立壺屋焼物博物館(編) 2003 平成15年度 企画展「東ヌ窯-アガリヌカマー」図録.  
那覇市立壺屋焼物博物館 刊行.
- 那覇市立壺屋焼物博物館(編) 2003 「壺屋の金城次郎 日本民芸館蔵 新里善福コレクション」図  
録. 那覇市立壺屋焼物博物館 刊行.
- 那覇市立壺屋焼物博物館(編) 2008 壺屋焼物博物館 常設展およびガイドブック.  
那覇市立壺屋焼物博物館(編) 2008 平成19年度 企画展「壺屋陶工遺作展—歴史と伝統に育ま

- れた工達の技」図録. 那覇市立壺屋焼物博物館 刊行.
- 那覇市立壺屋焼物博物館(編) 2008 平成 20 年度 壺屋焼物博物館開館 10 周年記念  
特別展「壺屋焼-近代百年のあゆみ-」図録. 那覇市立壺屋焼物博物館 刊行.
- 沖縄県立博物館(編) 1991 沖縄県立博物館企画展「壺屋陶工遺作展」図録.  
沖縄県立博物館 刊行.
- 沖縄県(監修) 2005 沖縄デジタルアーカイブ DVD 第 3 巻 沖縄の焼物-大地が育んだ用の美.  
曾根信一 2000 読谷村壺屋窯の始まり-金城次郎さんのこと-  
やちむん会(編) やちむん, 第 13 号, Pp. 58-63.
- 上村正美(監修・構成) 1988 壺屋十年 金城次郎雑器の美. 用美社.
- 渡邊欣雄 他(編) 2008 沖縄民族辞典. 吉川弘文館.
- 柳宗悦(編) 1942/1995 琉球の陶器. 榕樹社.